

32 スズメの学校からメダカの学校へー生活科の誕生ー

生活科がスタートしたのは平成4年である。しかし、奈良県教育委員会では、この新しい教科の円滑な実施を目指して、必要な措置を講じると共に、担当指導主事の配置や研究団体の育成などの仕事に取りかかっていた。行政的措置の中でも最も難しいのは、新たな担当者をおくために定員を増やすことであろう。そこで、昭和22年以後の戦後教育の中で、道徳や特別活動などの新しい教科等が設けられたときの措置について調査し、予算要求の準備を進めた。幸い、当時の学校教育課長吉井弘侑先生のご努力と上層部のご理解で、昭和63年には学校教育課指導第1係に担当指導主事がおかれることになり、4月1日には木村隆吉先生が着任された。

同じ日、生駒台小学校長を拝命した私は、県教育委員会でこの事務に関係していたという経緯があって、奈良県の生活科教育のスタートにかかわることになった。

当時、理科教育の仕事を進める立場にあった者の中にも、いろいろな考え方があった。その1つは、生活科の誕生は理科の切り崩しであるととらえるものであった。もう1つには、理科の原点に立ち返り、身近な自然とかかわる活動を深めるものであり、低学年の新しい教科として、これを歓迎し、このことによって一層理科教育が進展すると考えるものであった。

これまでも、県内小学校の各教科等についての研究は、それぞれの教科等の研究会で活発に行われてきた。研究成果は、年に1～2度の研究大会などで発表され、それが県内のそれぞれの学校の教育実践を高めている。こうした各教科の部会を統括しているのが、小学校長会会長が会長を務める奈良県小学校教科等研究会で、13部会があった。

しかし、平成4年からの生活科のスタートを前に新しい部会を設け

ることになり、奈良県小学校長会研修部長の大西重次先生の世話で、平成元年8月22日、春日野荘に各郡市の代表者が集まって設立準備のための会を開いた。この日には、部会のスムーズな発足のための協議が行われた。この会設立のための準備委員に選ばれた私は、奈良市代表の島田京一先生と規約案を検討し、ワープロを叩くと共に、会長に生活科部会のための予算措置をお願いし、県教育委員会へは助成の措置をいただけるように足を運んだものである。こうした甲斐あって生活科部会を平成元年度中に設立することになり、平成2年3月1日奈良県小学校教科等研究会生活科部会の設立総会を開いた。

開会行事のあと、規約・予算案が承認され、「生活科教育と平成2年度における移行のあり方」と題する講話を聞き、香芝町立（当時）二上小学校の森田理恵子先生の「生活科の趣旨をふまえた低学年社会の実践」に学んだこの会は、奈良県における生活科教育研究のスタートであり、文部省の中野重人視学官の言葉をお借りするなら、「スズメの学校からメダカの学校」への第1歩であった。

以後、この会は多くの先生方の協力を得て、研究大会や研修会が順調に開催されると共に、機関紙「奈良県の生活科」が発行され、県内における指導事例が集約された。これらには、吉野小学校の向井英彌先生の非常な努力があった。こうしたことで、奈良県の生活科は大きく前進し、東京で開かれた第1回の全国大会には2人の研究発表者や司会者を送り、私たちも分科会の指導助言を引き受けたのである。

次のページにあげたのは「奈良県の生活科」第2号に書いた「生活科を創り育てよう」と題する私の1文である。県内には、従来どおり社会・理科としながら生活科の趣旨を生かした展開をする学校と移行期間中から生活科としての実践をしている学校の2つがあり、共に新しい教科の誕生に向けて努力をしていたころの話である。

「やったあ！」「乗れるかな？」

発泡スチロールの空き箱をつないだ船を作りあげ、いよいよ浮かべようということになった日、プールのまわりには子どもたちの歓声がわきあがります。

「苗を植えるときには、どんなことに気をつけたらいいのですか」

「これはどんなにして作ったのですか」

これは、子どもたちが「畑の先生」「じいちゃん先生」「ばあちゃん先生」などと、親しみと尊敬の念をこめて呼んでいる学校の近くの人たちと共に活動する中での語りかけです。

「ぼく、上手に切れるようになったよ」

「わたしはアイロンかけができるわよ」

生活科や社会・理科の学習の中でのさまざまな活動や遊びを通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考え、生活上必要な習慣や技能を身につけてきているようです。また、こうした中で、友達とかかわりあい、共に成長し、子どもたち自身が生きていく力を自分のものにしてきています。

けれども、こうした活発な活動を誘発するためには、学習指導要領に基づいて生活科の目標や内容を理解し、学校や地域の環境と共に児童の実態を的確に把握して、学習の場を構成することが大切です。こうした綿密な企画の上に子どもたちの活動が広がります。

今年も県内各地の学校で、数多くの実践が行われました。そして、校内研修や郡市の生活科研究部会で報告され、みんなのものになってきています。新しい実践には苦心がありますが、創造には大きな喜びも伴います。

共に考え、互いに情報を交換しあって、自分の学校・〇〇小学校の生活科教育を創り出し、育てていきたいものだと思います。